

[第643回 大阪放送番組審議会議事録]

1. 開催日時 新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため、会議室での審議を止め、委員全員に書面参加で対応してもらった。書面提出の期日を令和4年1月28日（金）とした。

2. 開催場所 上記参照

3. 委員の出欠 委員の総数 6名

※ 新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため書面参加で対応

書面参加の総数 6名

書面参加の委員氏名

成瀬 國晴	河内 厚郎
たつみ 都志	鎌田 雅子
萩原 章男	内田 透

4. 議題

1) 番組審議（書面参加） 『SIBERIAN NEWSPAPER のしゃべり庵』

2) その他

5. 議 事 の 概 要

議題 1) 『SIBERIAN NEWSPAPER のしゃべり庵』

について、番組の企画意図・内容の資料をご覧のうえ、番組を聴取してもらい、書面でご意見を提出してもらった。

6. 審 議 内 容

社 側 <番組資料を送付>

『SIBERIAN NEWSPAPERのしゃべり庵』（毎週水曜日27:00～28:00）は、6人編成のインストゥルメンタルバンド「SIBERIAN NEWSPAPER（シベリアンニューズペーパー）」のメンバーが制作・出演するトーク番組で、コロナ禍で音楽活動がままならなくなる中での活動の第二幕として昨年10月にスタートしました。メンバーの過半数が音楽以外の仕事に就きながら活動する「社会人バンド」で、番組内では「いつもお世話になります」とあいさつを交わします。

番組では、音楽はもちろん、それ以外にも様々なことに焦点を当てます。「新しい世界、初めて聴く音楽や触れる考え方によって、知らなくても困らないけれど知ることによって明日からが少し変わるかも…」というコンセプトで番組を展開します。また、各メンバーの得意分野を生かしたコーナーを織り交ぜています。

<各委員の書面でのご意見>

委 員

出演者は深夜番組によく出る若者より苦労人のバンドマン達ということで好感を持って聴いた。コーナー「しゃべり庵」は音楽以外の仕事につきながら活動する彼らが招いたゲスト、和楽器演奏集団「独楽」の代表植木陽史さんの話の内容に引き込まれた。「走楽論」、鬼太鼓の太鼓を叩かないで生きるために何をやるか、などその偉大なる師の教えの数々を聴いていて40分が短く感じるほど。深夜番組は、このようにあるものだと強く感じた。このコーナーはタイトルとおりがゲスト次第だとも思った。上質のゲストを選ぶことが大切だ。

コーナー「山本周作のハードロックハイジャック」は、ハイテンションにまくし立てるというコンセプトだが、いい話を聴いた後なので、この落差に驚いた。制作者の意図（ターゲットとする世代）がハードロックとする

ならばそれは仕方のないことだ。ただこの回だけ聴いただけだからわからない。コーナー「ラジオ小説」は、ゲストやリスナーから集めたテーマを平尾さんのシナリオで演じるのだが、内容はともかく芝居にするよりコーナータイトルどおりのゆっくり聴くラジオ小説かエッセイにしたらどうかと思った。平尾さんは小説家なので大丈夫と思う。

委員 オープニングの音楽がフォークロア調で引き込まれる。
SIBERIAN NEWSPAPER は 2004 年に大阪で結成されたインストゥルメンタルバンドである。各メンバーの得意分野を活かしたコーナーを織り交ぜ、「知らなくても困らないけれど知ること明日からが少し変わるかも……」というコンセプトで、盛りだくさんな内容の番組になっている。
コーナー①「しゃべり庵」は、香川県出身の 2 人が、同郷のゲストで、学生時代からの知り合いである、和楽器演奏集団「独楽」の代表・植木陽史さんの話を聞き、これからの目標を問うという内容だ。喋りは自然体で、滑らか。音楽と喋りが一体になっていて、リラックス出来た。気楽に聞けるが、内容は軽くない。内輪ウケの話ではなく、話の中身には普遍性もあり、そういう意味でプロ根性が感じられた。ミュージシャンと芸人の違いなども興味深く、コロナ禍の下、なんとか生き抜いて行こうとする覚悟、「生きる力」を感じさせた。
コーナー②では、碓氷峠に降った雨が、群馬県側と長野県側、太平洋と日本海にそれぞれ流れるという、分水嶺の話が面白かった。わたしも数年前、本州でいちばん標高の低い中央分水界がある「水分れ」（丹波市氷上町）を訪れたが、以来、日本地図の見方が変わったように思う。
「ラジオ小説」のコーナーは趣向は面白いが、ストーリーはあまり印象に残らなかった。

委員 「SIBERIAN NEWSPAPER のしゃべり庵」の世界は、大人の時間ということか。放送時間は真夜中なので、深夜に仕事している人が漫然とラジオをつけていて、なんとなく聞くのにはいいのかもしれない。毒にも薬にもならないムード番組でいて、気づくと「知らない世界」を覗いている。「大人の教養番組」という副題の意味が分かった。
コーナー①「しゃべり庵」は、和楽器演奏集団「独楽」の植木陽史さんのユニークな話は面白かった。中国に留学したいために入った集団「鬼太鼓座」やその中での生活、田耕の指導の仕方（人としてどう生きるか）に興

味を持てた。津軽三味線の師匠との出会いと路上ライブの過程を、「全部のエリアを駆けまわって」という司会者の表現は面白いと思った。40歳になるときに「スタジオを立ち上げる」決意をしたが、42歳でコロナ騒ぎで、お金を借りて、事務所を飲食店に変更したと聞いたが、コロナでかえって苦労したのではないだろうか？アーティストと芸人の差の定義も面白い。またそこを出てから、グループ独楽を立ち上げたいきさつも興味深く聞いた。ただ、物足りなかったのは、2つある。

- ・なぜ母親は「鬼太鼓座」を勧めたのか？
- ・なぜ植木さんの楽曲をOAしないのか（コンサートに実際に行って欲しいという意図はあるにしても）。

「鬼太鼓」の演奏を聞いたことがあり、その迫力がOAで出せないとは思いますが・・・そこが残念。植木さんは雄弁で説得力のある話し方だと思った。コーナー②「山本周作のハードロックハイジャック」は、最初、CMかと思った。ベタベタの関西弁を使う意味が分からないが、ロックには合っているかもしれない。

コーナー③「ラジオ小説」は続きものなのか、これだけ聞いてもなんのことも分からなかった。

委員

今回の番組も楽しく聴かせていただいた。

全体的には、私の好きなタイプのラジオ番組で、和楽器演奏の植木さんの話は大変興味深く、途中のラジオDJ風のハードロックを紹介するのも、かっこよくて良かった。ただ、「シベリアンニューズペーパー」さんの名前を初めてきいたので、いただいた資料がないと、何をやっている方たちなのかわかりにくかった。それぞれの得意分野でコーナー分けして作られている番組だが、まずはどんなグループで何をされていて、というパーソナリティ本人たちの自己紹介が欲しかった。最初に登場したパーソナリティお二人のおしゃべりもとても聞きやすいいい雰囲気なので、オープニングはしっかりお二人のフリートークを聴きたかった。その上で、ゲストを迎えるというほうがよかったのではと思う。あと、「ラジオ小説」も、落語の「三題噺」的なお題があって、回収しながらの話だったが、その趣旨をもっと丁寧に、「こんな面白い試みなんです」と説明が欲しかった。コーナーの冒頭にサラッと紹介されていたが、最初聞いた時はコーナーの趣旨がイマイチ伝わらず、不思議なラジオドラマだなあと思ったが、聞き直してみてもお題があったことがわかった。初めて聞く人に向けても進めてもらえたらと思う。

今回の番組はまた聞きたいと思った番組だった。私の様に初めて聞いて良かったと思う人に向けて、しっかり自分たちのこともPRして欲しいと思う。もっと知りたいと思った。今回の番組もそうだが、最近のラジオ大阪の音楽番組が、藤川アナウンサーの「藤川貴央のDMZ」や、盲目のミュージシャン「山下純一のバリアフリーFUNK」とか、センスのいい秀逸な番組が増えてきたと感じている。

委員 「しゃべくり庵」は、40分近くを占める番組のメインコーナーだが、阿守さん、藤田さんの声が聞き取りやすく、内容も明確だった。今回ゲストの独楽代表の植木さんとも長年懇意であるとのことで、人柄や経験など話の引き出しどころは十分ご存じで、会話がスムーズに進んでいたと感じた一方で、植木さんの話を掘り下げて、具体を引き出そうとする投げかけがないと感じた。音楽を生業とする者や旧知同士の一体感が、一般のリスナーを置き去りにしている面があるのかもしれない。四国新聞の中国一周企画への参加や鬼太鼓座の田耕（でん たがやす）さんの教えなど、貴重な経験が語られるものの、背景説明や客観的な情報が不足しており、リスナーの共感につながっていないのではないかと感じた。三人には当たり前のことでも、初めてのリスナーに伝える気持ちが必要ではないだろうか。例えば、鼓屋に参加されている音楽家のコメントがあっても良かったのでは。ゲストの人柄や経験への共感がないと、最後の「プロ意識」と「アマチュア」の境の難しさや、「生きる力」や「生きるために稼ぐ」といった言葉が心に響くものにならないと思う。

また、独楽の楽曲を流さないという判断はどうだったのか。ライブやMVのように、迫力や美しさがラジオの音声だけでは伝わりきらないという考えもあると思うが、音楽のプロとして凄さが伝わるのは、音楽あつてのことだとも思う。鼓屋におられるなら、その場で良いところをわずかでも聞かせるということがあっても良かった気がする。

「ハードロックハイジャック」は、まくしたてているだけのようで、深い知識が垣間見えて楽しいコーナーだった。ただ、余談が多すぎて、曲そのものの紹介がもう少しあっても良かったのではと思う。

「ラジオ小説」は、お題が多すぎて、ここまで大喜利にする必要があるのかとは感じた。一方で、何のうんちくや感動もない荒唐無稽な話になってしまっているものの、筋書きが記憶に残ってしまう出来の良さがあることも確かだ。音楽のプロチームがそれぞれのメンバーの特技を持ち寄って、ラジオ番組に仕上げる挑戦的な番組だが、それぞれのコーナーで一般のリ

スナーを楽しませることができているのか、まだまだ磨き上げていくことがあると思う。

委員 美しいアンサンブルを奏でるインストゥルメンタルバンドながら、ほぼおしゃべりで通す1時間。そのギャップゆえか、不思議と引き込まれるような心地よさを感じた。午前3時からという深い時間帯の放送で、9回目とまだ若い番組ながら、radikoのリスナーを含め、楽しみにしているファンが一定層いるのではないかと想像する。

番組の冒頭、コーナー開始の合図のようなものがなく、唐突に始まるように感じたが、「独楽」植木代表へのインタビューが始まると一気に引き込まれた。植木さんのお話…母親からの何気ない勧めをきっかけにした和楽器集団・鬼太鼓座（おんでござ）との出会い、「生きていく術を学んだ」という中国での暮らし、「走ることと音楽は一体」という「走楽論」を唱える創始者・田耕（でん・たがやす）さんの教え、京橋での路上三味線ライブから徐々に活動の場を広げたという植木さんの「たたき上げ」の軌跡…。40分にわたる長いトークコーナーだったが、飽きることなく聴き入った。特別な技術を感じたわけではないけれど、阿守さん、藤田さんの聞き手としての引き出し方、間合いもちょうどよかった。

続く、山本さんの「ハードロック・ハイジャック」、番組の説明文にあるように、確かにハイテンションでまくしたてるコーナー設定だった。DJ風にリズムをつけて話しているのはわかるし、こういうしゃべりについていけない私の歳のせいもあるだろうが、「碓氷峠」「国道18号」「上山田温泉」など断片的な単語は耳に入ってくるものの、話として聞き取りにくく、内容が今一つ入ってこなかった。ただ、若い世代にはこれでいいのかもしれない。「ラジオ小説」は、大喜利方式でお題を選び、それを平尾さんが一つのシナリオに仕上げるということで、今回のお題が特に脈略をつけにくかったためか、ストーリーが入り組みすぎていて、「おー、なるほど」というふうには感じられなかった。ただ、コンセプトは面白いので、続けていれば馴染んでくるのではないかな。全体的には心地いい番組。今回をきっかけに、シベリアン・ニューズペーパーの楽曲をYouTubeで拝聴し、こちらにも引き込まれた。機会があればぜひ、シベリアン・ニューズペーパーの音楽主体の番組もやっていただきたい。

社側 書面での貴重なご意見、ありがとうございました。

以上

7. 審議会の答申又は改善意見に対してとった措置および年月日

な し

8. 審議会の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表内容・方法及び年月日

- ・「番組審議会だより」 (第643回大阪放送番組審議会議事録の要約)
「愛してラジオ大阪」 内で放送
放送日 令和4年 2月 23日 (水) 23時20分～23時30分
- ・「番組審議会だより」 (第643回大阪放送番組審議会議事録)
ラジオ大阪ホームページ (<http://www.obc1314.co.jp>) に掲載
- ・ 番組審議会の議事録の原本は事務局立ち会いのもと閲覧に応じる。